

死別と死者との絆—悲嘆のプロセスをめぐって

2024年10月19日(土) 14:40-17:50 司会 奥山倫明 東洋英和女学院大学教授

現代日本において死生学やスピリチュアルケア等についての研究が徐々に広がっています。大学や大学院における専門分野の確立、学会の設立などといった組織・制度面でも拡充が見られますが、さらに関心を共有する個々の研究者たちによって、さまざまな研究領域が開拓されつつあります。そのなかでも特に死別とその後の悲嘆(グリーフ)の問題は、重要な論点として関心を集めており、それを主題化した研究拠点の形成や共同研究の進展も見られます。

今回のシンポジウムでは、「死の受容」についての共同研究を推進してきた桜美林大学の長谷川(間瀬)恵美先生と、関西学院大学で「悲嘆と死別の研究センター」のセンター長として研究と実践に邁進されている坂口幸弘教授をご講演者にお招きし、「死別と死者との絆—悲嘆のプロセスをめぐって」を主題として議論を深めます。コメンテーターとしては、東京大学宗教学研究室・死生学応用倫理研究室の冨澤かな先生と、東京科学大学教授であり、(公財)国際宗教研究所の常務理事をお務めの弓山達也先生をお迎えします。

本シンポジウムを通じて、死別と悲嘆のプロセスと、そこから浮かび上がる死者との絆について新たな学びの機会が得られることでしょう。

長谷川(間瀬) 恵美

発題1

はせがわ(ませ)えみ

桜美林大学人文学系LA学群准教授

■プロフィール
 Lund大学(スウェーデン)神学・宗教学研究科博士課程修了(博士:神学)。宗教多元主義を土台に、諸宗教間対話、キリスト教の美学生(インカルチュレーション)、遠藤周作文学、カクレキリシタンについて研究を進め、現在は音楽死生学を研究中。

■主要業績
 著書に「Christ in Japanese Culture: Theological Themes in Shusaku Endo's Literary Works」, BRILL, 2008年, ISSN 0925-6512, 『深い河の流れ—宗教多元主義への道』(春風社, 2018年)。主な論文に「終末期における非医療的緩和的ケア—音楽死生学の質的研究—」『桜美林大学人文学研究』第1号2020年度, 99-113頁。など。

旅立ちを看取り、死を受容するということ —生命のあはひ、魂にふれる—

内容紹介:

2011年東北大震災の際、被災地小中学校に日本で唯一の音楽死生学士キャロル・サック宣教師と一緒に「魂のケア」に赴きました。以来、音楽死生学の研究を進めています。音楽死生学とは、終末期患者にハーブと歌声で祈りを届ける非医療的緩和ケアの一つです。今日は、音楽死生学の役割を宗教学的な観点から検証した研究成果と、自身の体験を交えながら宗教者が旅立ちを看取り遺族が「死」を宗教的に意味づけて受容することの意義についてお話ししたいと思います。

坂口幸弘

発題2

さかぐちゆきひろ

関西学院大学人間福祉学部教授

■プロフィール
 大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了、博士(人間科学)。関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授。同大学「悲嘆と死別の研究センター」センター長。専門は臨床死生学、悲嘆学。死別後の悲嘆をテーマに研究・教育に携わる一方で、ホスピスや葬儀社、保健所、市民団体などと連携してグリーフケアの実践活動を行ってきた。

■主要業績
 著書に、『もう会えない人を想う夜に—大切な人と死別したあなたに伝えたいグリーフケア28のこと』(ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2024年), 『自分のためのグリーフケア』(創元社, 2023年), 『増補版 悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ』(昭和堂, 2022年)などがある。

死者との絆とグリーフケア

内容紹介:

死別に伴う悲嘆は正常な反応ですが、ときに悲嘆の遷延化や精神疾患につながる危険性があり、必要に応じた遺族への支援、いわゆるグリーフケアが求められています。死によって故人の肉体は失われるものの、遺族にとって故人の存在が無に帰するわけではありません。技術の進歩に伴い、AI活用による故人との会話や仮想空間での再会など、遺族と故人の関係性のありようが改めて問われています。本発表では、グリーフケアの観点から、死者との絆のあり方について考えてみます。

コメンテーター

冨澤かな(東京大学大学院
人文社会系研究科准教授)

弓山達也(東京科学大学教授
・(公財)国際宗教研究所常務理事)

- シンポジウムはオンライン開催
- お申込み
 - 死生学研究所HPから
- 参加費: 無料
- お申し込み締め切り
 - 10月16日(水) 17時

